

# 黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.85 (March 31, 2018)

第85号 2018年3月31日

## 例会発表要旨

10月例会 2017年10月28日 明治学院大学横浜キャンパス

### ① 報告：ガーナ訪問(2017年1月)

古川 哲史(大谷大学)

報告者は2017年1月に10日間という短期間であったが、西アフリカのガーナ共和国を訪れる機会があった。初めてかつ短期間の旅程ゆえ、主たる訪問箇所を、首都アクラ、大西洋奴隷貿易の拠点となった城塞のあるギニア湾沿岸の町、内陸部に位置しかつてのアシヤンテ王国の首都クマシの3か所とした。

まず初めにアクラに到着した際の印象を述べ、サハラ砂漠から吹くハルマツタンで霞む空、英領ゴールド・コーストからの独立(1957年)の父クワメンクマ像などを紹介した。その後、パンアフリカ運動に多大な影響を与えたW・E・B・デュボイスが、最晩年にアメリカから移り住んだデュボイス邸、ガーナ大学の野口英世像などを写真とともに説明した。

次の訪問地は、ギニア湾沿岸部に残されたヨーロッパ人による城塞群であった。ユネスコの世界遺産に指定されているが、なかには崩壊寸前のようなものもあった。大西洋奴隷貿易との関連でその名がよく知られているものに、ケープ・コースト城塞、エルミナ城塞がある。それぞれ、「詳しいガイドの方を」とお願いし、内部を見学した。たいへん重たい体験であった。

その後は内陸部にあるクマシを訪れた。クマシでは、まず国立軍事博物館を訪問した。知人の研究者から教示してもらった、第二次世界大戦時の日本軍関係の「戦利品」を見るためであった。1944年、イギリスを相手にビルマ戦線でおこなった日本軍のインパール作戦は、補給をほとんど無視した無謀な作戦として知られる。その相手側のイギリス軍には英領植民地からの兵士がかり出され、ゴールド・コーストからの兵隊もいた。クマシの博物館にはその際に持ち返られた日章旗や軽機関銃が展示されている。

わずか10日間の旅ではあったが、訪れる場所ごとに、さまざまな想い／思いが湧いてきた。ぜひ、再訪したいと思う。

**関連写真**（写真5を除き、すべて筆者撮影、2017年1月）



写真1: アクラにある W・E・B・デュボイス(1868-1963)邸。デュボイス最晩年の家で、ワシントン大行進の前日にこの家で亡くなった。



写真2: 大西洋奴隷貿易の拠点の一つケープ・コースト要塞。  
スウェーデンが貿易の拠点を築き(1653年)、最終的にはイギリスが支配した。



写真3: ケープ・コースト要塞の「戻ることのない扉」(Door of No Return)



写真4:エルミナ要塞。ポルトガルが貿易の拠点として 1482 年に築き、最終的にはイギリスが支配。



写真5:ガーナ大学医学部にある野口英世像(1876-1928)。小さな日本庭園内にある。(医学部職員撮影)



写真6:かつてのアシャンテ王国の首都であり、アクラに次ぐ第2の都市クマシの軍事博物館にて。第二次世界大戦のビルマ戦線(1944年のインパール作戦)から持ち帰られた日章旗。他に、南部式軽機関銃、日本刀などあり。

## ② チェスター・ハイムズのハーレム・シリーズと犯罪小説の可能性

三石 庸子(東洋大学)

チェスター・ハイムズ(1909-1984)はリチャード・ライトとほぼ同時期の作家で、中産階級出身。強盗などによる3度目の逮捕で25年の判決を受け、19歳の時にオハイオ州立刑務所に入った。短編を書き始めたのは1930年頃、監獄内でのことである。7年半で出所したが、1936年は不況の只中であり、オハイオの作家プロジェクトの仕事などを経て、1940年にはラングストン・ヒューズ等の紹介状をもってハリウッドへ職探しに向かったものの、定職は得られずに造船所、軍需工場などの職を転々とした。その後アメリカで作家として生きること絶望し、ライト等を頼ってフランスへ行き、生涯ヨーロッパに留まった。フランスでは、勧められて新たに犯罪小説を書き始め、それが1957年の探偵小説グランプリを外国人作家による作品として初めて受賞してからは、名声を確立していった。

1945年に出版された代表作 *If He Hollers, Let Him Go* はロサンゼルスを舞台としており、*Native Son*(1940)と同じく、アメリカ社会のレイシズムを暴き出した「抗議小説」として評価された。ヨーロッパで作家として名声を得た「ラ・セリー・ノワール」というシリーズは、二人の黒人警官が登場するハーレムを舞台とした小説であり、9冊あるが、ハイムズの全体像が注目されるようになってきたのは90年代のことである。

現在ハーレム・シリーズは、抗議小説の系譜として、他のハイムズの作品同様、社会批判的側面が評価される。また、一方では抗議小説を越えた新たな黒人文学として、白人中心的視点を乗り越えたと評価されている。都市ブラックパワー、ヒップホップへ続くゲットー文化の先陣と位置づけられ、その文学は、口承文化、言葉遊び、ブラック・ユーモア、黒人音楽など黒人文化的であると評価される。

## ③ トニ・モリスンの *LOVE* における友情と愛

井上 怜美(元 神戸女学院大学・非)

トニ・モリスンの *Love*(2003) は、“friends”「友情」と“love”「愛」という言葉を使って、「愛」のある特徴を描いた作品として読むことが出来る。主人公クリスティンと母メイとの関係は拒絶から受容に変化し、メイの死の場面では「ついに二人は friends になった」と、そしてクリスティンと恋人フルーツとは受容し合う関係であったが、別れの場面では「friends として別れた」と書かれている。一方、クリスティンと幼友達ヒードはお互い拒絶しながら受容しており、ヒードは死を目前にして“Love.”とつぶやく。このように、親子関係、恋人関係に friends を、友人関係に love を適用するモリスンの言葉の使い方は一般的な使い方とは逆である。

今回の発表で、その理由を①雑誌や研究書中のモリスン自身の言葉、②モリスンの他の作品に比べて使用回数が圧倒的に少ない *Love* における単語 love(8回)の使い方、③料理人 L の証言から探ってみた。特に料理人 L の言葉によれば「社会の価値観に染まる前に愛の関係を結んだクリスティンとヒードは別れを強制されたら、精神を破壊しかねない」という。受容し合うだけの friends の関係より、受容と拒絶が併存する love の関係の方が相手を思う感情の濃度、強度が高い。love の特徴に焦点を当てて描く事で、モリスンは親子関係、恋人関係、友人関係という関係性ではなく、その関係性から生まれてくる人間同士のつながり、その内実の種類と密度に合わせるように言葉を選択している。そうすることで、私たち読者の

love「愛」に対する固定観念に揺さぶりをかけ、もういちど愛について考える機会を与えたのではないだろうか。

1月例会 2018年1月27日 龍谷大学深草キャンパス

## ① Toni Morrison における「教育」のデザイン——*Sula* の発芽の意匠をめぐって

長尾 麻由季(大阪大学・院)

本発表では、Toni Morrison の第 2 作目 *Sula* (1973)における自然のイメージに着目し、Morrison の文学における教育のテーマとの関連性を明らかにすることを目的とした。*Sula* のテキストを分析するにあたって、本発表では第 1 作目 *The Bluest Eye* (1970)を扱い、教育と種子のモチーフが相互に響き合う点を議論した。*The Bluest Eye* では、初等教育で広範に使用された読本「ディックとジェイン」シリーズと Claudia の種蒔きのエピソードが物語の枠組みを形成しているが、教育と種子は育てるという点において、また語源学の側面において共鳴する。また、Claudia の種蒔きは一枚岩的な「教育」の対抗軸として解釈され、オルタナティブな教育のメタファーとしても機能する。これらの議論を踏まえた上で *Sula* を検討すると、*Sula* においても *The Bluest Eye* と同様に、親世代から伝達される一枚岩的な「教育」が描写されており、両親から受けた躰により Nel の想像力が地下に追いやられるという表現から、Nel の本来持つ人間性や感受性が *The Bluest Eye* における種子の如く地面の奥底に押し込められるイメージが喚起される。それは発芽を許されぬまま抑圧されている一方で、いまだ発芽の可能性を秘めて地中で眠り続けていると捉えることもできる。実際に、Nel は両親によって抑圧されてきた感情を *Sula* の力を借りることで心の底から解放することができる。エンディングにおいて、Nel は時を経て Jude を失ったときの自分の悲しみの根源に気づき、*Sula* との想像上での協奏を通して地下に追いやられた感情を自然のイメージとともに解放するが、社会的な抑圧に抵抗して「発芽」を迎えるとき、すでに時は遅いという点においても *The Bluest Eye* と *Sula* は共振する。

## ② 奴隷と教育：教育を禁じなかったテネシー州における再建期の黒人について

加藤(磯野)順子(早稲田大学)

アメリカ建国来、共和制維持には選挙権を賢明に行使できる市民が社会を構成することが肝要であるとの考えから、教育の重要性は広く共有されてきた。一方、「人々は皆平等」であるべきアメリカで黒人奴隷制を正当化するためには黒人が常に劣等でなければならず、南部では彼らを教育することは禁じられていた。しかし、アーカンソー、テキサス、テネシーは奴隷に対する教育を州法で禁止しなかった。本報告では、3州中では最大の奴隷人口数を抱えたテネシーについて、禁止しなかった理由やその影響について考察した。

テネシーでは、黒人人口比率の低さに加え、東部・中部・西部の3地域によって奴隷制に対する依存度が異なることが白人間の結束を困難にし、黒人教育に関して州全体の合意に

至らなかった。アンテベラム期に各地域で読み書きを習得した黒人たちは、南北戦争開戦を受けて、北軍への協力から選挙権取得に至る様々な運動を州全体の黒人運動として展開した。さらに連邦および州議会や解放民局に文書で窮状を訴えた結果、テネシーでは他に先駆けて市民権を獲得した。

このような黒人の急進的な活躍は白人には受け入れがたく、奴隷制時代は制度への依存度の差異から結末に至らなかった白人が、奴隷制廃止後は暴力やテロによって黒人の躍進を阻止することで団結することとなったのは皮肉である。

しかし、戦前に初歩的な教育を受けた黒人たちが指導者となり戦後の市民権獲得に成功したことは教育の成果と言え、黒人の市民権獲得の歴史においてテネシーは特異な位置を占めていると考えられる。

### ③ August Wilson の *Fences* における 1950 年代過渡期の黒人男性像

妻神 諒(大東文化大学・院)

本発表では黒人演劇作家である August Wilson の作品 *Fences* (1985)の舞台である 1950 年代アメリカの黒人の生活に焦点をあて、黒人男性がどのように描かれ、その中でも、家族というコミュニティを通して黒人の父親像がどのように表象されているのかを考察した。

作者が本作の舞台設定において 1950 年代が 1960 年代に起こる変革が起きる前触れと述べていることをヒントに当時の歴史的背景を含めて考えていった。*Conversations with August Wilson* (2006)での David Savran のインタビューで Wilson が黒人男性像を英雄のように書きたかったと述べていることから、作者は劇中で横暴な父親としてかかれる Troy を肯定する立場にいることがわかった。事実 Troy の態度の中には歴史的な時代背景による影響がみえ、彼自身の父との確執の描写から横暴な態度は過去の父と結びつく負の部分であるということが解釈できる。その過去の負の結びつきを強調させているのが妻の Rose の存在といえる。

Wilson は *Seven Guitars* (1996)において母の存在に大きな影響を受けたと語っていることから、本作 *Fences* においても Rose は大きな役割を担っている。それは Troy の母と彼の前妻が逃げたのと違い浮気をされても家に留まったことが大きく関係し、後に生まれた娘の Raynell も息子とは違う育て方をしなければならない環境を作っている。これにより Troy の変化は女性が大きく影響していることがわかる。つまり、本発表において 1950 年代の黒人男性は未来に向けて考えを変える役割であり、それを女性の存在が大きな役割を担っていたことを明らかにした。今後の課題としては黒人女性の立場や歴史をより研究を深め、August Wilson の他作品を読み進め、本発表の結論をより鮮明なものにする。

### ④ 日系アメリカ作家チャールズ・キクチの黒人文学観：1940 年代南部における日系とアフリカ系との交錯

牧野 理英(日本大学)

第二次世界大戦中、人口統計学者でカリフォルニア大学の教授であったドロシー・スウェイン・トーマスの下で日系収容所に関する記録係をしていた日系アメリカ作家チャールズ・キ

クチは、閉鎖的な日系社会にとどまらず、アフリカ系アメリカ人の集団とも積極的に交流していた。60年代の公民権運動でアジア系アメリカの集団が触発を受け、アフリカ系アメリカとインターエスニックな関係を築いた70年代のことはよく知られているものの、それ以前の40年代に収容所で黒人文学に対する共感を表現できた人物は極めて稀有な存在といえる。

収容所から出てアメリカ軍部に入隊し、南部へおくられたクチの日記を分析したマシュー・ブリオネスは、Jim Crow Law下にある南部の日系収容者という立場が、アフリカ系アメリカ人、あるいは白人のどちらにも属しておらず、中間地帯“no-man’s-land”にあると分析する (*Jim and Jap Crow*, 211-2)。そのような状況にあったクチは終戦後、シカゴに行き、リチャード・ライトの *Black Boy* (1945) をリアルタイムで読む機会にも恵まれていた。クチの *Black Boy* に対する強い共鳴と、「中間地帯」に表される同一化できないもどかしさは同時に、ライトの50年代の作品である *The Outsider* (1953) の虚無的な空間とも共振し得るものがあるのではないか？本発表においては、このようなクチの、ライトに代表される黒人文学観に関し、現時点で報告できる情報をもとに発表させていただいた。

## 会員からの投稿

### ダンティカの作品を翻訳する

佐川 愛子(女子栄養大学)

私がこれまでに翻訳してきたエドウィージ・ダンティカの作品は、『愛するものたちへ、別れ  
のとき』(2010)(*Brother, I'm Dying*, Alfred A. Knopf, 2007)、『骨狩りのとき』(2011)(*The  
Farming of Bones*, Penguin Books, 1998)、『地震以前の私たち、地震以後の私たち』  
2013)(*Create Dangerously: The Immigrant Artist at Work*, Princeton University Press, 2010)、  
『海の光のクレア』(2015)(*Claire of the Sea Light*, Alfred A. Knopf, 2013)、『ほどける』  
(2017)(*UNTWINE*, Scholastic Press, 2017)の5作である。いずれの作品も最初の読書で深く  
心を揺さぶられ、翻訳したいという強い思いに駆られた。

黒人研究学会会員のみなさんへの作家紹介は不要と思うが、それでも一応主要なところ  
を紹介させていただけば、以下の通りである。

ハイチのディアスポラとしてアメリカに生きるダンティカの作品は、すべて故国ハイチとハイ  
チの人びとがモチーフとなっている。歴史と大国の覇権主義に翻弄されてきたハイチの人び  
との暮らしや、過酷な条件のもとで生き抜く人びとの心理を、不条理と不正義へのひるまぬ  
抗議を込めたりリカルで静謐な文体で描き出し、大きな注目を集めてきた。処女作 *Breath,  
Eyes, Memory* (1994)はいきなりオプラブッククラブ選書となり、著者自身の想像をはるかに超  
える数の読者を得て、彼女は『ニューヨークタイムズ』で「目が離せない三十歳以下の三十  
人」に特集された。翌年 *Krik? Krak!* (1995)を出版すると、今度は『ハーパースバザー』「重要  
な影響力のある二十代の二十傑」に選ばれた。この作品は全米図書賞の最終候補であった。  
*The Farming of Bones* (1998)は米国図書賞を受賞した。短編連作小説 *The Dew Breaker*  
(2004)は卓越した短篇集に送られる物語賞など3つの賞を受賞したほか、全米批評家協会  
賞およびペン／フォークナー賞の最終候補であった。*Brother, I'm Dying* (2007)は全米批評  
家協会賞(自伝部門)を受賞したほか5つの賞を受賞し、全米図書賞ノンフィクション部門の  
最終候補でもあった。2009年にはマッカーサー財団の天才賞を受賞。2011年には Langston  
Hughes Medal を受賞したほか、*Create Dangerously* (2010)で OCM Bocas Prize for  
Caribbean Literature を受賞した。*Claire of the Sea Light* は2014年の Andrew Carnegie  
Medal for Excellence in Fiction を受賞した。そして昨年11月には、ダンティカの2018年度ノ  
イシュタット国際文学賞受賞が発表された。これは、ノーベル文学賞に次ぐ権威とも評される  
賞であり、現在まで24名の受賞者のうち3名がノーベル文学賞を受賞している。さらに現在、  
*The Art of Death: Writing the Final Story* (2017)が、2018年度全米批評家協会賞、批評部門  
の最終候補となっている。

私のダンティカとの作品上の出会いは、風呂本惇子先生が科学研究費を得て2001年8  
月に始められた、カリブ文化・文学研究集會に参加させていただいた時であった。最初に  
*Breath, Eyes, Memory* を読んだ時から急速にダンティカの世界に惹き込まれていき、この研  
究会の集大成として風呂本先生が編集された論文集『カリブの風』(鷹書房弓プレス2004  
年)では *The Farming of Bones* 論を執筆した。この論文を執筆中の2003年8月に作家ダン



ティカとの個人的な出逢いがあった。そこで私は、この論文を書き上げた後、それを英訳して彼女に送った。すると彼女から「素晴らしい。とても感動しました。注意深く読んでくださって感謝します。あなたの知的解釈(intellectual observation)をととても楽しみました」とのメールをもらった。ダンティカの作品を翻訳して日本の読者に届けたいとの私の願望は、作品社との幸運な出逢いを経て 2010 年によく叶うこととなったが、ダンティカとは折に触れメールの交換を続けていたお蔭で、私の翻訳になる日本語版は、特別なものとなった。それは、私の求めに応じて彼女がそれぞれの本のために書いてくれた「日本の読者への手紙」をすべての本の冒頭に置けたことだ。ダンティカの作品はさまざまな言語に翻訳されているが、その国語の読者へのパーソナルな手紙は、おそらくこれらの日本語版にしかないもので、著者の思いをその本の読者の一人ひとりに届け、物語の世界にいざなう役目を果たしてくれていると思う。

以下、各作品についてごく簡単に紹介したい。

### 1. *Brother, I'm Dying* 邦題『愛するものたちへ、別れのとき』

ダンティカは、2歳の時に父が、4歳の時に母が、ニューヨークに移住した後、ハイチで12歳まで伯父夫婦に育てられた。ハイチではアメリカの支援により 30 年にわたって続いたデュヴァリエ独裁政権の残虐と腐敗と経済疲弊の時代が 1986 年によく崩壊した。しかし、「ラヴァラス(浄化する激流)」のスローガンの下その後の民主化運動を率いて、1990 年にハイチ史上初めて実施された民主的選挙で民衆の圧倒的支持を得て大統領となったアリストイドの民主改革も、内からは富裕層と軍部の、外からはアメリカの軍事・経済介入で、全く機能せず、2004 年にはアリストイドは二度目の失脚と出国を余儀なくされ、国内では反政府勢力とアリストイド派武装民兵の武装衝突が激化していった。ダンティカのジョセフ伯父さんはこの抗争に巻き込まれて、生命の危険を感じてハイチから逃れ、マイアミ国際空港で米国入国時に、パスポートもビザも持っていたのに、一時亡命を求めて拒絶され、税関国境保護局に拘留されていた間に亡くなる。「弟よ、私は死にそうだよ」とは兄から弟(ダンティカの父)への言葉だ。ダンティカの父は、家族を養うためにブルックリンでタクシーの運転手として働き続けて——「時には一日に 16 時間続けて」——最後は肺線維症で亡くなるが、亡くなる直前、ダンティカが父の名前をもらってミラと名づけた、生まれたばかりの孫娘を抱くことができた。ダンティカは「日本の読者への手紙」で言っている、「私がこの本を書いたのは、大切な先祖たちと新しい生命とに敬意を表し、正義を要求し、世界中の移民たちの窮状に目を向けてもらうためでしたが、同時に私は、この本を読むことが読者の方々にとって喜びでありますようにと願っています。……この本で、皆さんを私の国にお連れし、私たちの喜びと苦しみを体験していただきたいと思います。」

### 2. *The Farming of Bones* 邦題『骨狩りのとき』

主人公アマベルは、ドミニカ共和国の独裁者トルヒーヨの命令でドミニカ軍がハイチとの国境地域のサトウキビ農園で働く多くのハイチ系移民を殺した 1937 年の大虐殺の渦に巻き込まれるなかで、人生を翻弄されるハイチ人女性である。物語は彼女の視点から彼女の言葉で語られる。ダンティカは、「作家は証言者である」と言う。彼女は、アマベルの物語を紡いでゆくなかで、不当に低い価値を与えられ、搾取され、歴史の間に葬られてきた人びとの封じられた口を開き、虐げられ、抹殺された人びとにも、それぞれにかけがえのない命があり、それぞれが語るべき物語を持っていたことを示し、それらの物語を想像的に再生することで、この歴史的悲劇を生み出した社会の、そして人間心理の、からくりを可視化する。ハイチの女性

として隣国ドミニカで遭遇した大虐殺によって壊された人生を語るアマベルの、どこまでも彼女だけのものである物語が、強く私たちの心を揺さぶり、深い共感を呼び起こすのは、それが、この地上に生きる同じ人間のこととして、同時に私の物語でもあり、彼女の人生を共有することによって、私自身の今の生が問われてくるからだろう。

### 3. *Create Dangerously: The Immigrant Artist at Work* 邦題『地震以前の私たち、地震以後の私たち それぞれの記憶よ、語れ』

タイトルの直訳は「危険を冒して創造せよ——創作する移民芸術家」である。けれども、2010年1月12日、ハイチの首都ポルトープランスをマグニチュード7の地震が襲った。そして、2010年に出版されたこの本の第12章「私たちのゲルニカ」にダンティカは、「これから先はずっと、地震以前のハイチと地震以後のハイチがあるのだ。そして、地震後のこれからは、私たちの読み方も書き方も、ハイチ国内でも国外でも、もう決して以前と同じではないだろう」と書いている。加えて、この日本語翻訳版の出版時には日本でも東日本大震災を体験し、ダンティカの感懐はそのまま私たちのものでもあったから、この深い思いを邦題とした。この本は、原題が示すように、ハイチのディアスポラで、アメリカに住んで執筆する移民作家として、自らの立ち位置を確認し、創作することの意味と意義を問い続けるダンティカの思索をまとめたものである。彼女は言う。「危険を冒して創作する、危険を冒して読む人びとのために。これが、作家であることの意味だと私が常々思ってきたことだ。……もし今でなくとも何年も先の将来に、私たちはどこかでまただれかの命を救うかもしれない。なぜなら、彼らが私たちに、私たちが彼らの文化の名誉市民とするパスポートを与えてくれているから。」

ダンティカは、いつか危険を冒して自分の作品を読んでもくれるかもしれない読者のために、命がけで書く。ダンティカの作品世界に生きるのはハイチの人びとであり、彼女の愛はつねに、苛酷な運命を背負ってきた故国ハイチとハイチの人びとに注がれる。そしてそれが、人種や国籍の壁を越えて読者の心をつつのは、その愛が広く深い普遍性をもって読者の心に共鳴の波動をひき起こすからなのだ。このテーマについては、ダンティカ自身が「日本の読者への序文」のなかでこう述べている。「作家アルベール・カミュは——私は、彼の作品から本書のタイトル(原題「危険を冒して創作せよ」)を借りていますが——スウェーデンにあるアプサラ大学で1957年12月に行った最終講義で言いました。『今日、創造することは、危険を冒して創造することです。出版とは一つの行為であって、その行為は、作者を、なにものをも容赦しない時代の熱情に曝すのです。それゆえ、問題は、このことがはたして芸術に不利となるのかどうかを知ることではありません。芸術と、芸術が意味するところのものがなくては生きていけないすべての人にとっての問題は、ただ一つ、創造に特有の自由が……いかに可能となるのかを見つけることです』。これが、本書の主題です。みなさんが本書を楽しんでくださることを願います。ですが、私のいちばんの望みは、みなさんがこの本に心を動かされ、背中を押されて、みなさん自身の物語について考え、それを語ってくださることです。危険を冒して、ではなくとも、みなさんにできる方法で。」

### 4. *Claire of the Sea Light* 邦題『海の光のクレア』

ハイチの首都ポルトープランスからほど遠くない美しい海辺の町と、そこに住む幾人かの人びとの物語である。これより10年前に出版されて高い評価をえた *The Dew Breaker*(露を壊す者)は、それぞれが短編としても読み得る9の章から成る小説であったが、本書も同じ体裁を採用している。これは表題の少女クレアとその父ノジアスの物語であるが、同時に、クレ

アの住む町ヴィル・ローズとその住民の物語である。クレアの7歳の誕生日の朝に始まり、その日の夜に閉じられる一日のうちに、話者の視点は過去と現在を行き来しつつ、この町に住む幾人かの人に順番に注がれる。この小さな町でもとりわけ生き難さを抱えながら生きている人びとである。章が進むにつれて、この人たちの物語が少しずつ絡み合い、少しずつ明らかになる事実を繋ぎ合わせるうちに、私たちは、クレアの運命はどうなるのかという切ない疑問を抱きながら、同時に、この人びとがさまざまな要因に、殊にもハイチ特有の社会的状況に、翻弄されている、やりきれない不条理に思いを致すことになる。

ダンティカは日本の読者への手紙で、この作品の執筆と同時に取り組んでいたドキュメンタリー映画『ガール・ライジング(立ち上がる少女たち)』に言及しながら、述べている。「このドキュメンタリー映画と著作——小説、つまり架空の話です——には、次のような共通点があります。まず、ともに一人の少女の生を通してより大きな物語を語っているという点です。『ガール・ライジング』に込められたメッセージは、少女たちは彼女らのコミュニティの(世界のと言い換えてもよいかもしれません)サポートを得て教育を受けなければならない、ということです。私たちはまた、グローバルな経済政策は、発展途上国の貧しい人びとの生活を破壊し、彼らの経済的自立を妨げるものであること、そして、貧しい人びとが自分の子どもたちに——男の子にも女の子にも——食事を与え、育み、教育を受けさせることをほぼ不可能にする状況を作り出すという事実を無視することはできません。……これがもしも私の娘だったら？と私はよく、この本を書きながら自分に問いかけました。もしも私が、ノジアスが直面している選択を迫られたら、どうするだろう？われわれの立ち上がる少女たち全員の親が直面する困難な選択に。もしもクレアが私の娘だったら、どうするだろう？この少女たちが私の娘だったら、どうするだろう？／それから、私は思い起こすのでした。ある意味で、どの子どもみんな私の子どもなのだ。そして、私たちの子どもなのだ。」

##### 5. UNTWINE 邦題『ほどける』

これまでに訳出してきた小説の主人公はハイチに住む貧しい人びとだったが、この物語の主人公たちは違う。ダンティカ自身の世代よりさらに豊かな次の世代、ダンティカのように苦勞と努力の末にアメリカでまずまずの地位と経済力を手に入れた人びとの子どもたちの世代の若い人びとだ。双子の姉妹ジゼルとイザベルは、両親とハイチに住む祖父母からハイチの歴史と文化を受け継ぎつつ、アメリカの若者文化を生きている。突然の自動車事故でイザベルが死に、ジゼルは生き延びる。イザベルを失ってから17歳の誕生日までの試練の数か月間のジゼルを中心に、さまざまな形の愛と葛藤が描かれる。ジゼルとイザベル姉妹の愛、それぞれの初恋と友情、夫婦の愛とそれぞれの人生、そして双子の祖父たちの人生。読者は、ハイチ系アメリカ人という登場人物たちの文化的背景に思いを致すことがたとえなかったとしても、私たち人間には一人ひとりにたった一つのかげがえのない命と人生があるという、分かりきった事実を今更のように突きつけられ、その重みと尊さを——臓器移植の問題をまで含めて——あらためて考えさせられることになる。

米国内でハイチが話題になる時は、ほぼ必ずどこかの報道機関がダンティカに意見を求める。トランプ政権による昨年のDACA(若年移民に対する国外強制退去の延期・救済措置)撤廃やハイチ人へのTPS(一時保護資格)の停止に続き、先頃のトランプ大統領による“All Haitians have AIDS.”と“shithole”発言のあともそうだった。ダンティカはいつも静かに、しかし力強く、大国が築いた不当に巨大な壁に行く手を阻まれているハイチの人びとの思いを

自らの言葉に重ねて、語る。そんな時私はいつも、アリス・ウォーカーの言葉を思う。「深い智慧に満ちた彼女(ダンティカ)の文章は、ハイチの現在の混沌と騒音の背景に流れる静かな川だ。……彼女の故国を、彼女抜きで考えることはできない。」

## 人生こそ本当のオリンピック

古川 哲史(大谷大学)

人種差別と闘いつつ歴史に名を残したアフリカ系アメリカ人(アメリカ黒人)のスポーツ選手といえば、日本ではメジャーリーグで人種の壁を破った野球選手ジャッキー・ロビンソンや、先日亡くなったボクシングのモハメド・アリなどが挙げられることが多い。その両者に比べると、本映画の主人公である陸上選手ジェシー・オーエンス(1913年-80年)の知名度は低いであろう。しかし、第二次世界大戦(1939年-45年)も間近い1936年に開催されたベルリン・オリンピックでの、100メートル走をはじめ4つの金メダルを獲得した活躍は、オーエンスの名をオリンピック史に、そして世界史に刻むことになった。

1913年9月、オーエンスはアラバマ州北部オークビルの貧しい小作人の家庭に生まれた。オーエンス家の祖先はアフリカからアメリカへ連れてこられた奴隷であった。1865年の憲法修正第13条によって奴隷制は廃止されていたが、南部ではまだ黒人への人種差別が根強く残っていた。そのような環境の中で、オーエンスは幼い頃から畑を手伝うなど家族の生計を助けた。オーエンスが走ることに目覚めたのも、幼少期であった。オーエンスは後年、その当時を振り返り、「わたしはいつも走ることが好きだった。それほど得意ではなかったが好きだった。走ることは自分の力だけでできる。どの方向にだって行けるし、速くも遅くも自分の思いのままだ」と述べている。走ることは、貧困や人種差別から、彼の心を解き放ってくれるものであった。走ることに「自由」を見つけ出したのである。

1922年、オーエンス一家は北部オハイオ州の商工業都市クリーブランドに引っ越す大きな決断をした。その時期の多くの黒人家族と同じく、かつての奴隷時代とあまり変わらない農園に縛られた南部での生活から抜け出そうとしたのである。北部にはもっと良い暮らしがあると期待もあった。

クリーブランドでは、オーエンスは地元のボルトン小学校に入学したが、家族の助けとなるよう、放課後には靴屋で働いたり、日用品の配達などの仕事をした。フェアマウント中学校に入ると、そこで彼の人生に大きな影響を与える二人の人物と出会うことになった。その一人は、ルース・ソロモンという女生徒であり、彼女もまた南部からクリーブランドへ移住してきた家族の一員であった。二人は出会ってすぐに親しくなり、後に結婚することになる。(結婚後、ルースは厳しい暮らしの中でも、最後までオーエンスを支えた。)

オーエンスが中学校で出会い、彼の人生を変えたもう一人は、体育教師で陸上部のコーチであったチャールズ・ライリーである。学校の運動場を走り回っているオーエンスに運動能力の高さを見て取った。しかし、オーエンスは放課後は働かねばならず、陸上部には入れなかった。そこで、ライリーは彼だけのために早朝練習を設けた。それほど、ライリーはオーエンスに潜在的能力を見出していたのである。また、オーエンスは白人と密接な関係を持ったことなどなかったため、自分の家族の一員のように扱ってくれるライリーに信頼を寄せた。

1930年、オーエンスはクリーブランドのイースト・テクニカル高校へ入学した。そこでは陸上

専門のコーチがないこともあり、引き続きライリーがオーエンスの指導を任された。ライリーの指導の下、オーエンスは選手として成長し、人間としても大人になっていった。中学校で鍛えた能力を、高校に入っても引き続き伸ばした。

1933 年秋、オーエンスはオハイオ州の州都コロンバスにあるオハイオ州立大学に進むことになった。当時は、スポーツ選手に対する奨学金などなく、選手たちは自分ですべての費用を支払わねばならなかった。(オリンピックもアマチュア資格の厳格な規程があった。)オーエンスは学生食堂などで働きつつ、学業と陸上の両立を図らねばならなかった。また、人種差別が残る地域への遠征旅行では、オーエンスを含め黒人選手たちは、チームを外れて「黒人用」レストランで食事をし、「黒人用」ホテルに泊まらねばならなかった。

そうした経済的困窮と人種差別に対峙しながらも、オーエンスはオリンピック出場という夢を捨てることはなかった。オリンピック選手を何人も育てた大学陸上部の名コーチであるラリー・スナイダーの下で力をつけていった。そして、1935 年の大学陸上競技大会の一つビッグ・テン競技会では、わずか 45 分の間に、220 ヤード走、220 ヤード・ローハードル走、走り幅跳びで世界新記録を、100 ヤード走では世界タイ記録を出したのであった。

本映画は 1933 年の大学入学から 1936 年のオリンピックに至るオーエンスの活躍に焦点が当てられている。1936 年のベルリン・オリンピックは、「アーリア人種」至上主義を掲げて、ユダヤ人を迫害し、人種差別を公にするアドルフ・ヒトラー政権、ナチ党下による開催であった。「ヒトラーのオリンピック」とも呼ばれた。アメリカではオリンピック参加かボイコットか世論が分かれたが、最終的に全米オリンピック委員会は参加を決定した。オリンピックを目指してきた選手達には朗報であった。オリンピックは 4 年に一度しか開催されないのである。どんな理由であれ、一度チャンスを逃した選手は二度とオリンピックに出られないこともよくあった。(実際、1940 年開催予定の東京オリンピックは政情ゆえに中止された。)

オリンピックでのオーエンスの活躍は、映画に描かれている通りである。100 メートル走ではオリンピックそして世界タイ記録の 10 秒 3 で優勝、次いで走り幅跳び、200 メートル走、4 × 100 メートルリレーと金メダルを獲得した。4 つのメダリストとなったオーエンスの活躍は、人種の壁を打ち破り、ヒトラーの理念を打ち砕く大きなシンボルとなり、このオリンピックは「オーエンスのオリンピック」とさえ呼ばれるようになった。

映画では詳しく扱われていないが、オリンピック後のオーエンスにも触れておきたい。4 つの金メダルを持って帰国した者なら、今日ではマスコミや企業などから様々なイベントに高額で招かれることもあろう。しかし、時代は 1930 年代であり、帰国後もオーエンスは依然として経済的に苦勞し、実話にもとづく最後のホテルのシーンにあるよう、人種差別に苦しめられた。結局、オーエンスは大学を中退し、職を探すことになる。なかには、キューバのハバナで競走馬と競うという、落ちぶれたと思われる仕事も引き受けた。その後、クリーニング店を設立したが事業は一年も持たず失敗した。1943 年には、妻と 3 人の娘を養うためにフォード社に勤めたが、45 年には契約を切られた。

1950 年、AP通信が過去 50 年間でもっとも優れた陸上選手としてオーエンスを選んだ。その頃から、徐々に彼の経歴が活かせる体育関連の仕事が入り、1954 年にはイリノイ州知事の命を受け、イリノイ州体育委員会で働き、リスクに囲まれがちな若者に運動することの利点を説いた。ついで合衆国政府でも同じような仕事に就き、親善大使などの役割を果たしている。1972 年には、オーエンスは、かつて退学したオハイオ州立大学から、陸上界への貢献による名誉博士号を授与された。1974 年には、全米陸上競技の殿堂入りをしている。1976 年にはホワイトハウスに招かれ、大統領自由勲章を受けた。その後、1980 年に肺がんで亡くな

るまで、講演などで全米各地を回った。1990年には、文民に与えられる最高の賞である議会名誉黄金勲章が故オーエンスに授与されるなど、アメリカではオーエンスの「再評価」がなされている。

オーエンスは自著のなかで「人生こそ本当のオリンピック」と記している。まさにオーエンスの人生は波乱に満ちたものだった。本映画の原題は *Race* という簡潔なものだが、競技の「レース」とともに、同じ綴りで人種「レイス」を意味する言葉が重ねられている。オーエンスは一人の陸上選手として競技に挑み、一人のアフリカ系アメリカ人として人種差別と闘った。オーエンスにとっては、その原動力は走ることにあり、走ることが彼の生きる力となっていたのだろう。

追記：

本稿は、映画パンフレット『栄光のランナー 1936／ベルリン』（東宝、2016年、15-16頁）からの転載である。映画に関しては日本語版DVDが発売されているので、関心のある方はそちらを観ていただきたい。オーエンスの生涯をより詳しく知りたい方は、ジェフ・バーリングゲーム著、古川哲史・三浦誉史加・井上摩紀訳『走ることは、生きること——五輪金メダリストジェシー・オーエンスの物語』（晃洋書房、2016年）が参考になる。



映画『栄光のランナー 1936／ベルリン』（2016年）チラシ  
\* 原題は *RACE*（アメリカ・ドイツ・カナダ合作、2016年）

## 入 会 者

氏名:岡本 晃幸 (おかもと てるゆき)

所属:藤女子大学 講師

自己紹介文:この度黒人研究学会に入会させて頂きました藤女子大学の岡本晃幸です。専門は Edgar Allan Poe を研究してまいりました。Toni Morrison が *Playing in the Dark* で Poe を分析して以来、現在の Poe 研究において人種は最重要テーマの一つとなっております。本学会で黒人研究に関する知見を深められたらと存じます。皆様から色々ご教授頂きましたら幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

氏名:上神 彰子(うえがみ あきこ)

所属:一般

自己紹介文:ヒップホップ音楽好きの社会人です。大学時代はアメリカ文化や黒人の歴史の授業を受講。現在は音楽関係(Jazz)の仕事をしています。2005年に YAPPARIHIPHOP.COM というウェブをスタートし、昨今のUSヒップホップ音楽を通じてアメリカの黒人文化や歴史リサーチしています。ヒップホップ研究の趣味が高じて『ベース・ミュージックディスクガイド』(DU BOOKS)で黒人ダンス文化に関するコラムを執筆。歴史/文化に関してさらに理解を深めるべく入会させて頂きました。最近気になるのはネイション・オブ・イスラムです。

氏名:妻神 諒(さいがみ りょう)

所属:大東文化大学大学院 文学研究科英米文学専攻 修士課程

自己紹介文:現在までに August Wilson の作品群を用いて黒人研究を進めている。学部時代に戯曲からアメリカ史を研究することに関心があり、特に August Wilson の作品 *Radio Golf* (2005)を読んだことで黒人のアメリカ史に興味を抱く。また Alice Walker や Lorraine Hansberry、Sojourner Truth のスピーチなどにも深く興味を抱いた影響から黒人女性のアメリカ史も並行して研究をしている。今後の研究としては August Wilson の作品の軸である、黒人の内面の問題を研究し、特に女性と男性の関わりが互いの精神面でどのように影響を受けているのかを Wilson の作品を通して、また他の作家を通して研究することを目指す。

(順不同)

## 編集後記

今回の会報の編集はおおいに知的好奇心をそそられるものであった。また、数多くの写真も寄せていただき視覚からも刺激を与えてくれる華やかなものになったと思われる。

例会の発表では古川先生の西アフリカ、ガーナ訪問の報告をはじめ、文学研究ではトニ・モリソンの作品やチェスター・ハイムズの探偵小説、日系人作家チャールズ・キクチと黒人作家との関係について、劇作家オーガスト・ウィルソンの作品論など多岐にわたり、さらには歴史研究から南部テネシーでの教育に関する発表が行われた。また、「会員からの投稿」の欄ではカリブ文学と黒人アスリートに関する投稿を寄せていただき、会報全体から見ても様々なジャンル、視点から黒人研究に関する情報を与えてくれるものになったと思われる。

自身の研究を行っているとは視野を広げようと意識はしていても、どうしても関連したものになってしまいがちになる。そこでこういった豊かな研究報告は、自分の情報処理能力と作業効率の悪さ、情報をアップデートし続ける必要性を痛感する一方で、改めて未知の領域に対する好奇心と探求心を掻き立ててくれるのでありがたい。今後も目で見て読んでおもしろい会報作りを心掛けていきたい。

(猪熊 慶祐)

＜編集＞ 黒人研究学会・編集部  
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1  
立命館大学文学部・坂下史子研究室気付

＜編集者＞ 猪熊 慶祐  
gr0313sp(a)ed.ritsumeai.ac.jp  
ホーム・ページアドレス  
<http://home.att.ne.jp/zeta/yorozuya/jbsa/>